

「偽りを捨て真実を」

エペソ人への手紙 4 : 25

June.2.2024

エペソ人への手紙 4 : 25 (パウロ)

Preface

先週は、古い人を脱ぎ捨て新しい人を着るための、御言葉とともにある霊の刷新と聖霊の満たしの重要性について学びました。

今読みましたエペソ書 4 : 25 以降では、怒りを放っておかないことや赦し合うことや盗んではならないことなど、具体的に、「霊が新しくされ続けながら着る新しい人とは何なのか？」というその内容と実践について教えて下さいます。

そして、今日の聖書箇所エペソ 4 : 25 の言う「新しい人」とは、「偽りを捨て、隣りに真実を語り、互いにかからだの一部分同士であるということを実践すること、またそのような人である」と語ります。

そこで今朝は、ここで言う「捨てるべき偽り」とは何のことで、「隣りに」とは誰のことで、「真実」とは何なのか、そして、「互いにかからだの一部分である」とはどういう意味なのかについて考えたいと思っております。

Part One

まず、「偽り」とは何なのかということについて考えたいと思います。

ここで「偽り」と訳されているギリシャ語の $\psi\epsilon\upsilon\delta\omicron\varsigma$ プセウドスという言葉は、「嘘」という意味の言葉です。

つまり、「偽りを捨てる」とは、「嘘を捨てる」ということです。

「嘘」とは、本当ではないコトやモノを、あたかも本当であるかのように装うことです。

イスラエルの民たちが約束の地カナンに入る際に、神様が、神の言葉を記したモーセ五書を授けて下さりながら、実際にカナンの地で幸いに生きて行くために必要なこと、守らなければならないこと、行わなければならないこと、その生き方や信仰姿勢について語って下さいました。

その中に、「不正を行ってはならない」、「嘘をついてはならない」というある意味、人として社会を健全に営んでいく上で守るべき、至って当たり前のことを語って下さいます。

「商取引をする際に不正な秤を作ったり、使ったりしてはならない」とか、「人の飼っている家畜が迷子になっていたら見て見ぬふりをしたり、勝手に自分のものにしたるのではなく、主人が見つけに来るまで面倒を見てあげるか、もし持ち主が分かったならば届けて上げなさい」とか、「社会的弱者に強く、強者に弱くあってはならず、公平に裁きを下しなさい」というように、生活上直面するだろう具体的な「嘘・偽りを避けること」について教えて下さいます。

色々ありますが、一例として一つ御言葉を見てみたいと思います。

申命記 25 : 13 - 16 (パワボ)

「時と場合、または人を見て、不正な利益に心奪われそれを正当化しながら、正確な秤と不正な秤を作って、使い分けするようなことをしてはなりません。良心の呵責をしっかりと覚えなさい」と語って下さいます。

「不正によって得た富は甘いようで苦く、結局は、あなたがた自分たちの首を絞めることになり、滅びを招くから！」と、少し考えれば分かるようなことまで教えて下さいます。

足もと 1 m 先以上のことが見えずに、目の前の草を食べることばかりに気を取られ、いつのまにか崖に達していることにも気付かずに崖から落ちて死んでしまう羊のような視力の弱い、想像力に欠けた、先行きをしっかりと見通すことの出来ない存在が私たち人間であることを、この父なる神様の諭しから感じずにはられません。

「主があなたに与えようとしておられる」、「あなたの神、主が忌み嫌われる」と、至って当たり前に見えるような倫理道徳的なことさえも、私たち罪人には、**主なる神様**を意識しなければ心に留めることさえも出来ないんだということを示唆しています。

「そんな当たり前のこと！」と思えてしまう、この当たり前のことが出来ずに、イスラエルという国家は、このモーセ五書が語られた後約 830 年後に実際に滅びてしまいました。

アモス書を見ますと、神様が「そんな不正やってはいけませんよ」と教えて下さったことに反して、履き物一足で人のいのちを売り買いするような貧富の差・蛮行が平然と行われるようになってしまっているイスラエルの偽りに満ちた姿が記録されています。

何もこれは遠い国の遠い昔の話ではなく、私たちの生活でも知ってか知らずか、平然と行われていることが少なくないように思えます。

例えば、コンビニでも、コーヒーショップでもどこでもいいですが、そのコーヒー一杯を飲むために作られているコーヒー豆の生産地や生産国や農場では、子どもたちが学校に通う代わりに農作業に駆り出されて、コーヒー豆を収穫し、その収穫したコーヒー豆がどのように食されるのかも分からずに、その貧困を生きています。

最近では、そういった状況を変えようとする活動も行われていますが、そんなに変わっていないというのが実状のようです。

私たちの周りに、学校に行く代わりに農作業に駆り出されて、飲み物として食されるコーヒーを知らないような子どもがいるのでしょうか？

もちろん、社会の歪みの中でのいるかもしれませんが、根本的にコーヒー農場の子どもたちが置かれているところとは違いますよね。

履き物一足で人のいのちを売り買いするイスラエルという小さな国で、遠い昔に行われていたようなことが、現代では、グローバル経済・グローバル社会というカッコいい名目の下、世界を股にかけて、美味しいとか、いい香りとか、かっこつけるかのよう、白昼堂々で行われているのが事実です。

これは、ほんの一例だと思います。

では、なぜこんなことになってしまうのか？

「互いにかからだの一部である」ということを認識できないからですよね。

口が目を騙し、脳が耳に錯覚を起こさせ、右手が左手を憎いと傷つけ、鼻が足に向かって「お前はとんでもなく臭いにおいを発しているけれども、自分で匂いを嗅げないなんて、なんて無能なんだ！」と、からだ互いに一部分であるという至って当たり前のことを忘れていくかのような状況に、人同士、至って当たり前のように、至極自然に思い、思わされ、染まり、受け入れているからなのでしょう。

Part Two

偽りは、社会を腐敗させます。

人間関係を壊します。

国を滅ぼします。

そして、自分自身を悪に染めてしまいます。

さらに、染まった悪を伝染させます。

自分のみならず、隣人も巻き込みながら悪に染めてしまいますので、それがいつの間にか当たり前になり、麻痺して、価値観となり、世界観となり、その価値観や世界観に立脚した目の前のことばかりに捕らわれ、自らの首を締め上げていることにも気付かずに、徐々に慣らされて行きます。

正に、サタンの策略通りなのかもしれません。

神を覚えず、神より与えられた土地・恵みだということ認識せず、神の霊を失った状態が当たり前になり、その失った空間・隙間にサタンの霊や教えや考えが入り込んでいることが至って自然なことになり、常識になります。

だから、御言葉による霊の刷新という霊的戦いを、私たち常日頃から意識する必要があります。

エペソ人への手紙6：11-18（パウロ）

私たちの戦いは、人との戦いではありません。

もろもろの悪霊に対する戦いです。

「人が憎い」、それは、その人が憎いという以前に、悪霊との戦いです。

「偽ってでも利益を上げ、経済的に1円でも潤いたいし、勝利し、ぎゃふんと言わせたい」、それも、プライドや自分の能力を示すことではなく、悪霊との戦いです。

「私の方が優れている、正しい、あの人が間違っている、いらぬ」も、突き詰めていきますと、悪霊との戦いです。

「偽り」を捨てることは、私たちの力で出来るものではありませんし、私たちの能力で成すことでもありません。

真理なるキリスト、その方についての福音、福音を信じる信仰、そして、聖霊と神

の言葉と祈りによるものです。

つまり、「神の助けをどれだけ求めるか、どれだけ神の目を、神の言葉を意識するかに掛かっている」と、使徒パウロは教えて下さいます。

Part Three

ジョン・ストットという牧師は、「エペソ書4：25の『偽り』は、究極的に、偶像崇拜、神ではないものを神として崇めることを表わしている」と言います。

私もその通りだと思います。

ローマ書に行ってみましょう。

ローマ人への手紙1：25（パウロ）

ここで「偽り」と訳されている言葉も、エペソ書4：25の「偽り」と同じギリシヤ語 ψευδος プセウドスという言葉です。

「彼らは神の真理を偽りと取り替え、造り主の代わりに、造られた物を拝み、これに仕えました」、つまり「偽り」とは、唯一まことの神を神としないこと、唯一まことの神を神としないことに起因するすべての人の肉のわざ、神にとって代わって自分の中に存在する神のようなモノやヒト、何か特定の宗教が推奨する神かもしれませんし、お金かもしれませんし、知識や名誉や文化文明や風習かもしれませんし、自分自身かもしれませんし、いずれにしろ、神にとって代わって居座り、結果的に拝み、仕えるようになってしまっている唯一まことの神よりも大事にしているその何かが、究極的な「偽り」です。

レビ記19章に行ってみましょう。

イスラエルの民たちが入っていくカナンの地で、社会を建て上げていく上で気をつけ、心配らなければならない大切なことについて教えて下さいます。

レビ記19：1－5、9－18（パウロ）

「ならない、ならない、ならない、ならない」と、打ち消しの助動詞がずっと並び、「してはならない」という禁止事項が列挙されていますが、最後18節には、核心を突く、そのすべての「ならない」の、起因し帰着する言葉を語って下さいます。

「あなたの隣人を自分自身のように愛しなさい。わたしは主である。」

結局のところ、すべての「ならない」の発端は、愛の欠如です。

どういう愛？

隣り人を自分自身のように愛する愛。

その人のことが私のことであるかのような気遣い、配慮、思いやり、心持ち。

目が麗しければ、耳も、口も、手も、足も、頭も、全身が喜び、

指先一本が痛めば、目も、口も、耳も、お腹も、全身が痛いような愛。

目と口と鼻がそれぞれ離れた、関係性を持たないそれぞれの部位ではなく、目も口

も鼻も耳もそれすべたが麗しい、可愛い、カッコいい、尊い顔を成り立たせ表現するために無くてはならない、互いに大切な唯一無二の部位であるという当たり前の繋がりを、人間同士においても覚えること。

それが愛。

そして、そのような愛は、「わたしは主である」という言葉にすべて集約されます。

即ち、唯一まことの聖なる神を神とし、その神を崇め、その神を見上げ、その神を褒めたたえ、その神を愛し愛されている、その神がいのちである、その神が私の主であることに、「あなたの隣人を愛しなさい」という生き方、実践、良い行いすべてが起因し、帰着するということです。

今読みましたレビ記19章の中で最もたくさん出てくる言葉、「ならない」という言葉に継いで次に多く出てくる言葉・決め台詞が、「わたしは主である、私は主である、わたしはあなたがたの神、主である」という言葉です。

もし人が、「わたしは主である」という言葉を台無しにし、亡き者とし、最大の心遣いと信頼を持たないならば、それは「偽り」へと帰着してしまうということです。

エペソ書4：25の「私たちは互いに、からだの一部分なのです」という言葉が、私の中で生き、実践するために必ず必要な条件は、「わたしは主である」という神の言葉が、私のうちにドカッと堂々と居座って下さっているのか、そうではないのか、いて下さるように努めているのかいないのかということです。

以前、人類史上最初の音楽は、創世記2章のアダムがエバに歌ったラブソングだということを見ましたが、神との関係が疎遠になる前の、罪人となる前のアダムにとってエバは、アダム自身でした。

エバにとってのアダムも、エバ自身でした。

互いが互いに自分自身であり、二人は一体であり、アダムあつてのエバであり、エバあつてのアダムでした。

ところが、「わたしは主である、わたしはあなたがたの神、主である」ということを忘れ、否定し、亡き者とし、自分が神の座に居座ったその瞬間から、アダムはエバに向かって、「この女が、この女のせいだ！」となり、エバはエバで、その男性的な肉体的に圧倒する暴力的なアダムの姿に恐れたじろぎ、アダムの目を真っすぐ見つめることが出来なくなってしまいました。

そんな互いにかからだの一部分であることを忘れてしまった二人から生まれてきた二人の子供、カインとアベルは、「こいつが、こいつが、こいつがむかつくんだ！」と、兄カインは弟アベルを殺してしまうという人類初の殺人事件を家庭内で起こしてしまいました。

アダムとエバ、カインとアベルには、「私たちは互いに、からだの一部分なのです」という思いが、綺麗さっぱり無くなってしまいました。

それからの人類の歩みは、聖書に記録されている通りですし、今も私たちが苦悩し、祈っている通りです。

そして、その張本人が、私たち自身でもあります。

私たちは、「わたしは主である。わたしはあなたの神、主である」ということを認めなければ、心から隣人を自分のからだの一部だとは思えません。

到底、何の下心も無しに、自分の土地の収穫を隅々まで刈り取らずに、それが必要な人たちのために残して置くことなんか出来ないですし、ひと房何百円、何千円もする高級なおいしいぶどうの実を洗いざらい取り尽くさないで置くことなんか、「わたしは主である」ということを覚えない限り出来ません。

むしろ、隣の畑の収穫や実が、自分のところのものよりも青く見えて、「一粒でも、ひと房でもご賞味させて頂きたい」と、自分の収穫を手を持ったまま、隣の畑に入って拾い集めてしまうような罪なる思いが、私たちの内にはあります。

だから、モーセの十戒の10番目には、こんなことまで書かれています。

出エジプト記20：17（パウロ）

なんとまあ、情けないほどの欲に駆られてしまうのが、私たち、「わたしは主である」ということをなおざりにしてしまった時の罪人の姿です。

Part Four

もう一度、エペソ書4：25を読みます。

エペソ人への手紙4：25（パウロ）

「あなたがたは偽りを捨て」、つまり、「わたしは主である。わたしはあなたがたの神、主である」ということに留まり、そこに留まり続ける戦いを私たちの戦いとすることが、偽りを捨てることであります。

そして、「私はあなたがたの神、主である」ということに留まり続けた時に実践させて頂けることが、「隣り人に対して真実を語る」ことです。

「隣り人」と言いますと、思い出されるイエス様の例え話があります。

良きサマリア人の話ですよね。

ルカの福音書10：25－37（パウロ）

神を愛すこと、人を愛すことは知っているし、そうしたいと思っているし、まあ少しは出来ていると思っている。

そんな自分の正しさを示したい、言い表したいと思っている一人の人の質問に対してイエス様がお応えになったお話しが、良きサマリア人の例え話でした。

ここから私たち教えられることは、「自分の正しさを示したい」という相対的な、

比較や競争心で人を見続ける限り、どんな人も自分の隣り人にはなり得ないということです。

口が目に向かって、「え、こんなおいしい味も分からないの？」と言っているような、鼻が耳に向かって、「え、こんな臭いにおいも分からないの？　こんないい香りが嗅げないの？」と言っているようなことをしながら、人と接し、人のことを見下げ、人のことを思っていることに気付かない、認めない、自分の正しさばかりに思いが行ってしまう限り、妻でさえも、夫でさえも、我が子でさえも、親友でさえも、同僚でさえも、隣り人にはなり得ないんだということを、イエス様教えて下さいます。

このサマリア人のことを、「あわれみ深い行いをした人」とイエス様仰いましたが、何かこう高尚な人が、その高尚で豊かな人生経験をもって施す美しい善行があわれみ深い行いではなく、ただ単純に、「その人のことが我が事のように感じられること」、つまり、互いにかからだの一部分であることを覚えられることだということを教えて下さいます。

私たち歌を歌う時、その歌は、どの体の部分で歌うのでしょうか？

口ですよ。

または、喉も大切になってくるでしょうし、さらには、綺麗に歌を歌うためには、腹筋を上手にどれだけ使えるかにも掛かっていると思います。

これらすべてが、歌という音を発するために必要な体の部位ですが、もう一つ、声を発するためには一切直接的に用いられない、綺麗な声で歌を歌うために決定的に必要な大切な体の部位があります。

どこでしょうか？

耳です。

どんなに良い喉、良い口、良い腹筋を持っていたとしても、音をちゃんと聞き取ることの出来ない耳で、音程の合った綺麗な声で歌を歌うことは出来ません。

良い声で歌を歌うために決定的な働きをするのが、音を一切発することの出来ない耳です。

歌は、耳で歌うと言っても過言ではないぐらいに、耳で音を聞き取ることが歌うことの土台になります。

どれだけ正確に音を聞き分けるかが、その歌の質を決めます。

「私は歌を歌えるけれども、あなたは音の一つも出せないでしょ！」と、耳を否定し、耳なんかいらなと言った瞬間、もう口は、歌を歌えなくなります。

こんな当たり前のことが、私たちの人間関係・人間模様において理解出来ていないということを、イエス様は、サマリア人の例え話は通して教えて下さいます。

Part Five

また使徒パウロは、「そんな私たちが互いにかからだの一部分であることを覚えるために必要なのが、真実だ」と言います。

エペソ書4：25で「真実」と訳されている言葉は、数週間前に見ました ἀλήθεια
アレセイア「真理」と訳されている言葉と同じです。

つまり、「真実を語る」とは、「イエス様を語る」、「イエス様を覚える」、「イエス様
が自然と口から出て来ずにはいられない」ということであり、イエス様あつての「隣
人」であるということです。

「わたしが道であり、真理であり、いのちなのです」、「真理はイエスにあるのです
から」ということを覚えて、初めて、人が私の隣人になるんだということですね。

そうして初めて、互いに、キリストをかしらとするからだであることを覚えられる
ということです。

エペソ書4：25の言葉は、大きい規模で捉えることも出来ると思いますし、小さ
い規模で見ることも出来ると思います。

即ち、キリストをかしらとして、初めて人は、皆が互いにからだの一部分である
ということに気付ける、真のグローバリズムである地球規模、または万物を含めた宇宙
規模、神の国規模で互いの繋がりを見ることが出来る。

また、もう既にキリストを主と告白するキリスト者同士の群れである教会におい
ても、やっぱり、一番最も心を配り、覚え、意識しなければならないことは、キリスト
がかしらであるということを知覚することですね。

キリストを覚える時にこそ、全宇宙、全地球、教会という群れの一人一人が、一つ
一つが、互いにからだの一部分であるということに留まり、気遣い、実践出来るとい
うことです。

エペソ5：29－30 (パウロ)

そして、もう一箇所。

ピリピ2：2－5 (パウロ)

「古い人を脱ぎ捨て、新しい人を着る」とは、神ではないものを神とする偽りを捨
て、イエス・キリストのことを覚えながら、隣り人のことを互いにからだの一部分だ
と思いを一つにし、神を褒めたたえる賛美を歌うための口であり耳であると、互いに
遜って、互いに人を自分よりも優れた者と思えること、またそれを実践するための霊
の戦いを諦めない人です。

Conclusion

最近読んだ本の中で、こんな話がありました。

農作業を一緒にしている二人の兄弟の話なのですが、この兄弟はいつも一緒に農作
業をして生計を立てているので、収穫した稲をいつものように同じように分け合いま
した。

するとその日の晩、兄はこんな風に考えました。

「弟は所帯を持ったのだから、色々と準備するべきことが沢山あるだろう。」

その同じ晩に、弟はこんな風なことを思いました。

「お兄ちゃんは、僕たちよりも家族が多いから、米が沢山なくちゃならないだろう。」

そして、弟は自分の稲束を兄の家に移しました。

兄は兄で、自分の稲束を弟の家に移しました。

翌日、陽が昇って明るくなってから見ますと、稲束の高さがそのままでした。

昨日の晩、確かに稲束を移したはずなのに…です。

「間違いなく昨日の晩、稲束を移したのに…、減っていなくちゃならないはず稲束の高さがそのままとは…。鬼がいたずらでもしたのかなあ。」

兄も弟も、首をひねりながら不思議に思いました。

そしてまた翌日の夜、もう一度、兄も弟も、互いの家に稲束を移しました。

でも、また翌朝見てみますと、自分たちの稲束に変化がないことを発見しました。

何か変だと思いつつも、理解出来ませんでした。

で、またまた同じことを繰り返し替えました。

するとある晩、月の明るい夜、いつもと同じように稲束を背負った二人の兄弟は、農道の途中でばったりと出くわします。

「お前か!」、「なんだ、お兄ちゃんだったの!」

びっくりして声を上げた二人は、幸せそうに笑い合ったそうです。

なんと麗しい話でしょうか。

「ですから、あなたがたは偽りを捨て、それぞれ隣人に対して真実を語りなさい。私たちは互いに、からだの一部分なのです。」

この御言葉が、イエス様ゆえに、私たちの内で、私たちの間で、コンコンと湧き出る泉のように湧きださせて頂けるよう祈っていきたく思います。

お祈りいたします。

祝祷：エペソ 4：25